

副所長定例講座

「『歎異抄』思想の解明」第Ⅲ期・第9回（通算第29回）

第六章——親鸞は弟子一人ももたず

「ただ念仏」と師弟関係

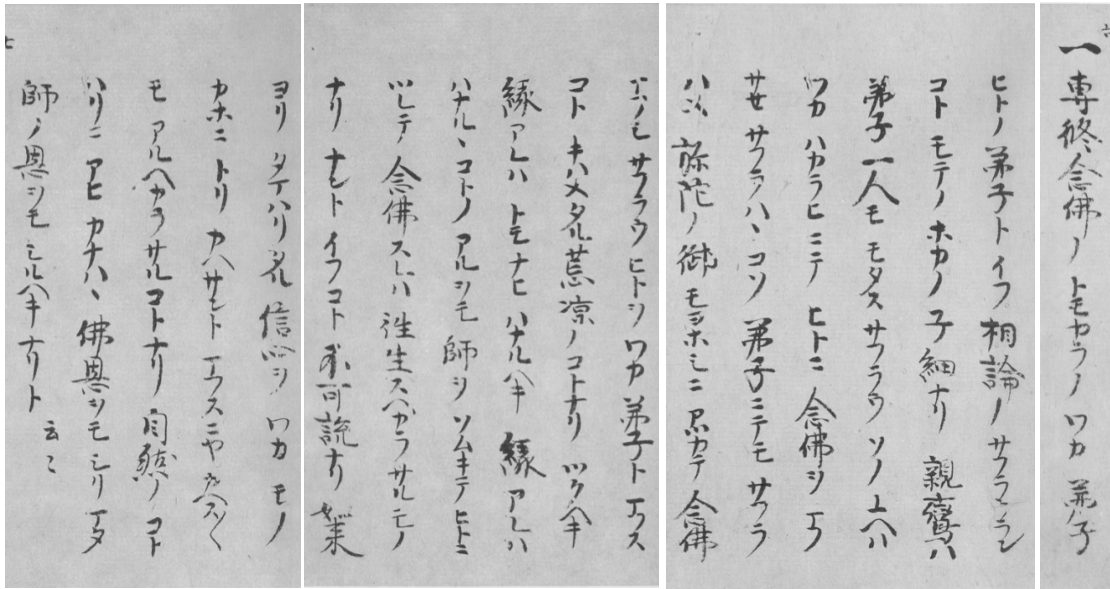
加来 雄之

小慈小悲もなければ 名利に人師をこのむなり

（親鸞『正像末和讃』）

無一物の師、無邪気の弟子、問難往復以て事理を討究する、是れ開発的教育に至当の方法たらずや。

（清沢満之「ソクラテスに就きて」）



蓮如書写本	【安良岡『歎異抄全講読』現代語訳と構成】
一(六) ①専修念佛のともがら^の、わが弟子ひとの^{弟子}といふ相論のさふらうらんこと、もてのほかの子細なり。 ②親鸞は^{弟子}一人ももたずさふらう。 ③そのゆへは、わがはからひにて、ひとに念佛をまふさせさふら	(一)専修念佛の信者間における、他人を弟子扱いにするという相論の不当さ 一 ① ^{念仏だけを専心してとなえる仲間}の人々^が、これは自分の弟子だ、あれは他人の弟子だという^{口争い}があるようでございますことは、とんでもない事態である。 ②この親鸞は、弟子をひとりも持たないのです。 (二)弥陀から賜った信心にもとづく、他人の念仏を、自己の私物化することの甚だしい不当さ。

はゞこそ、弟子にてもさふらはめ、弥陀の御もよほしにあづかて念佛まふしさふらうひとを、わが弟子とまふすこと、きはめたる荒涼のことなり。 ④つくべき縁あればともなひ、はなるべき縁あればはなるゝことのあるをも、師をそむきてひとにつれて念佛すれば、往生すべからざるものなりなんどいふこと、不可説なり。 ⑤如来よりたまはりたる信心をわがものがほにとりかへさんとまふすにや。 ⑥かへすがえすも、あるべからざることなり。 ⑦自然のことはりにあひかなはゞ、佛恩をもしり、また師の恩をもしるべきなり。 ⑧と云ふ。	③そのわけは、自分の取りはからいで、他人に念仏を申させますならば、それこそ弟子でもございまいしょうが、阿弥陀仏の御誘いを受けて念仏を申します人を、自分の弟子と申すことは、甚だ尊大なものの言い方である。 ④自分に従うはずの縁があれば一緒になり、自分から離れ去るはずの縁があれば離れ去ってしまうことがあるのに、<u>師匠</u>から離れそむいて、他の人と一緒になって念仏すれば、往生はできないものだなどと言うことは、言葉に出して言えないほどひどいことである。 ⑤阿弥陀如来からいただいた信心を、自分の持ち物であるかのような勝手な様子で、取り戻そうとして言うのであろうか。 ⑥よくよく考えても、<u>そのようにしてはならないこと</u>である。 (三)本願の自然の道理に従って、理解されるはずの仏恩と師の恩 ⑦自然という、<u>阿弥陀仏の本願のおのずからお助け下さる道理に自分の信心が一致するならば</u>、み仏の御恩をもわかり、また、<u>念仏の道を教えて下さった師匠の御恩をもわかるはずなのである</u>。 ⑧……
---	---

【蓮如本と聖典（永正本）との校異】 弥陀の御もよほし—ひとえに弥陀の御もよほし

【はじめに】

・『歎異抄』における第六章の位置——とくに第五章との関係。

師訓篇——起行訓——利他（浄土真宗が関係存在としての救い、もしくは共同体としての救いであることを課題とする。）——三福（『観無量寿経』世福）

		世福	
		慈心不殺	慈悲
生	身命	孝養父母	回向
命	言葉	奉事師長	自然 如来よりたまわりたる信心

┌人身受け難し今すでに受く……父母……身 ……事実

└仏教聞き難し今すでに聞く……師弟……言葉……意味

関係存在である人間にとって、とくに師弟という関係は、口伝によって歴史をもつ仏教共同体が形成されるとき重要な要素である。

【第六章の主題について】

・「先師口伝の真信に異なることを歎く」ことを主題する『歎異抄』、言い換えれば、「よきひとのおおせをかぶ」ることの本質をあきらかにしようとする『歎異抄』において、「師」と「弟子」との関係を課題にする第六章は重要な位置づけをもっている。第二章で「親鸞におきては〔中略〕法然聖人にすかされまいらせて念仏して地獄におちたりともさらに後悔すべからず」と表現された師弟関係（源空と親鸞）が問いなおされる章であるとも言える。

・宗教言説の本質を見失うと、宗教言説は、「霊的暴力」「霊的支配」「霊的隷属」などとして機能する。その点について曾我量深は次のように指摘している。

次に異義八か条があるが、これも「わが弟子ひとの弟子、という相論」が直接原因となってでてくる。しかし、異義八か条の根源はそれぞれ考えられるが、第二条も第三条もその根源になるが、まさしく旗をかかげて異義を主張する野心は、わが弟子ひとの弟子とするところにある。これは聞法の念がないからである。聞其名号をしらず、自分自分でかってに自分のはからいで信仰を主張するからである。

（曾我量深『歎異抄聴記』第十三講）

・親鸞は、いわゆる信仰の病、宗教集団のおそろしい一面を深く見つめていた。私たちはどうすれば、宗教的人格（カリスマ）や教義（ドグマ）への執着（イデオロギー）を超えていくことができるのか。浄土の教えは、その教えそのもののなかにそのことを反省し深くみつめる契機もしくは要素を担保しているかどうかが重要である。

（例えば、親鸞の思想は、果たして、みずからの宗教心のイデオロギー性について無自覚なのであろうか。私は、『教行信証』化身土巻が信仰の病を超えていくという課題を（「対偽対仮」として）担ったのではなかったかと考える。）

・「師」のあり方が問題になっていたことは、『歎異抄』第十八章に「いかにたからものを仏前にもなげ、師匠にもほどこすとも、信心かけなば、その詮なし。」と批判されているので、当時、「奉事師長」を往生の条件とする見解があったのであろう。私は第六章を拝読するときいつも遺教として有名な次の釈尊の言葉を思い出す。

アーナンダよ。修行僧たちはわたくしに何を期待するのであるか？ わたくしは内外の隔てなしに（ことごとく）理法を説いた。完き人の教えには、何ものかを弟子に隠すような教師の握り拳は存在しない。『わたくしは修行僧のなかまを導くであろう』とか、あるいは『修行僧のなかまはわたくしに頼っている』とこのように思う者こそ、修行僧のつどいに関して何ごとかを語るであろう。しかし向上につとめた人は『わたくしは修行僧のなかまを導くであろう』とか、あるいは『修行僧のなかまはわたくしに頼っている』とか思うことがない。向上につとめた人は修行僧のつどいに関して何を語るであろうか。〔…中略…〕

アーナンダよ。今でも、またわたしの死後にでも、誰でも自らを島とし、自らをたよりとし、他人をたよりとせず、法を島とし、法をよりどころとし、他のものをよりどこ

ろとしないでいる人がいるならば、かれらはわが修行僧として最高の境地にあるであろう。―誰でも学ぼうと望む人々は―

(岩波文庫『ブッダ最後の旅』第二章)

・第六章によって親鸞は師弟関係を否定したとする理解もあるが、果たして親鸞は師弟という関係そのものを否定していたのであろうか。そうではないと思う。実際、親鸞には法然聖人に対してのみならず、仏道において師・善知識が決定的に重要であるとする言説が多く存在する。

・親鸞には、師をそしり・善知識を軽んじることを誡める言葉も残されている。

また往生の信心は、釈迦・弥陀の御すすめによりておこるところそみえてさふらへば、さりとともまことのこころおこらせたまひなんには、〔…中略…〕師をそしり、善知識をかるしめ、同行をもあなづりなんどしあはせたまふよし、きき候こそ、あさましく候へ。すでに謗法のひとなり、五逆のひとなり、なれむつむべからず。

(『御消息集(広本)』『聖典』(第2版) 689頁)

・『歎異抄』第六章に出る「如来よりたまわりたる信心」、この言葉こそ『歎異抄』が序にかかげた「先師口伝の真信」の核心をなすものである。「如来よりたまわりたる信心」において、師弟関係がなくなるのではなく、このような信心の理解においてのみ純正な師弟関係が成り立つ。それを展開するのが「後述」に示される「信心一異の相論」というエピソードであろう。

ある意味で、第六章は、先師口伝の真信に異なる」、つまり「先師口伝」というあり方、また「真信」という『歎異抄』の根本課題に応じる章である。

また次回以降の課題であるが、第六章と第十六章との対応も考える必要があろう。第十六章には、「回心」ということや「自然」ということが重要なテーマとして出ている。このことから第十六章が、師訓篇に第六章のおおせを抄録した意図を伺う上で、重要な指標を与えてくれるであろう。

【第六章の背景について】

・直接には、「消息(手紙)」など見えるような信者の奪い合いという実際の事情があったからであろう。そこには善鸞事件における秘伝という事情があるのであろう。

慈信坊(善鸞)のくだりて、わがききたる法文こそ、まことにてはあれ、ひごろの念仏は、みないたずらごとなりとそうらえばとて、おおぶの中太郎のかたのひとびとは、九十なん人とかや、みな慈信坊のかたへとて、中太郎入道をすてたとかやききそうろう。いかなるようにて、さようにはそうろうぞ。詮ずるところ、信心のさだまらざりけるとききそうろう。

(『御消息集(広本)』『聖典』(第2版) 704頁)

『歎異抄』の記された当時の「わが弟子ひとりの弟子といふ相論のさふらうらん」具体的な状況については覚如の『口伝鈔』『改邪鈔』の記事によって推測することができる。

(6) 一 弟子同行をあらそい、本尊・聖教をうばいとること、しかるべからざるよしの事。

常陸国新堤の信楽坊、聖人 親鸞 の御前にて、法文の義理ゆえに、おおせをもちいもうさざるによりて、突鼻にあずかりて、本国に下向のきざみ、御弟子蓮位房もうされていわく、「信楽坊の、御門弟の儀をはなれて、下国のうへは、あずけわたさるるところの本尊をめしかえさるべくやそうろうらん」と。「なかんずくに、釈の親鸞と外題のしたにあそばされたる聖教おおし。御門下をはなれたてまつるうへは、さだめて仰崇の儀なからんか」と云々 聖人のおおせにいわく、「本尊・聖教をとりかえすこと、はなはだしかるべからざることなり。そのゆえは、親鸞は弟子一人ももたず。なにごとをおしえて弟子というべきぞや。みな如来の御弟子なれば、みなともに同行なり。念仏往生の信心をうることは、釈迦・弥陀二尊の御方便として発起すとみえたれば、まったく親鸞が、さずけたるにあらず。当世たがい違逆のとき、本尊・聖教をとりかえし、つくるところの房号をとりかえし、信心をとりかえすなどということ、国中に繁昌と云々 返す返すしかるべからず。本尊・聖教は、衆生利益の方便なれば、親鸞がむつびをすて、他の門室にいるというとも、わたくしに自専すべからず。如来の教法は、総じて流通物なればなり。しかるに、親鸞が名字ののりたるを、法師にくければ袈裟さえの風情に、いといおもうによりて、たといかの聖教を山野にすつというとも、そのところの有情群類、かの聖教にすくわれて、ことごとくその益をうべし。しからば衆生利益の本懐、そのとき満足すべし。凡夫の執するところの財宝のごとくに、とりかえすという義、あるべからざるなり。よくよくこころうべし」とおおせありき。

(覚如『口伝鈔』六、『聖典』(第2版) 799-800 頁)

(8) 一 わが同行、ひとの同行と、嫌別してこれを相論する、いわれなき事。

曾祖師 源空 聖人の『七箇条の御起請文』にいわく、「諍論のところには、もろもろの煩惱おこる。智者これを遠離すること百由旬、いわんや一向念仏の行人においてをや」と云々 しかれば、ただ是非を糺明し邪正を問答する、なおもってかくのごとく厳制におよぶ。いわんや人倫をもって、もし世財に類する所存ありて相論せしむるか。いまだその心をえず。祖師聖人御在世に、ある御直弟のなかに、つねにこの沙汰ありけり。そのとき、仰せに云わく、世間の妻子眷属もあいしたがうべき宿縁あるほどは、別離せんとすれども捨離するにあたわず。宿縁つきぬるときは、したいむつれんとすれどもかなわず。いわんや出世の同行等侶においては、凡夫の力をもってしたしむべきにもあらず、はなるべきにもあらず。あいともなうというとも、縁つきぬれば疎遠になる。したしまじとすれども縁つきざるほどは、あいともなうにたれり。これみな過去の因縁によることなれば、今生一世のことにあらず。かつはまた、宿善のある機は、正法をのぶる善知識にしたしむべきによりて、まねかざれどもひとをまよわすまじき法燈には、

かならずむつぶべきいわれなり。宿善なき機は、まねかざれどもおのずから悪知識にちかづきて、善知識にはとおざかるべきいわれなれば、むつばるるも、とおざかるも、かつは知識の瑕瑾もあらわれしられぬべし。所化の運否、宿善の有無も、尤も能所共に恥ずべきものをや。しかるに、このことわりにくらきがいたすゆえか。一旦の我執をさきとして宿縁の有無をわすれ、わが同行、ひとの同行と相論すること愚鈍のいたり、仏祖の照覧をはばからざる条、至極つたなきものか、いかん。しるべし。

(覚如『改邪鈔』、聖典六八二～六八三頁)

＝＝＝＝＝＝＝＝＝
【本文講読】

六一

(第六章) 一つ。

・第四・五章のあとにおかれ、「如来よりたまわりの信心」を示して利他という課題を結ぶ。

専修念佛のともがらの、
専修念仏に帰した仲間の人々が、

- ・第六章が「専修念仏のともがらの」という呼びかけから始まる意味はなにか。
 - ・「専修念仏」とは法然聖人によって説かれた「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」という「よきひのおほせ」によって示された道である。
 - ・親鸞は、源空聖人の専修念仏の教えである「浄土宗」の真実義を「浄土真宗」と呼び、その教えの核心を「選択本願」に見出していた。なぜ親鸞はここで「浄土宗のひと」や「浄土真宗のともがら」と呼びかけなかったのか。ちなみに『歎異抄』付録では「法然聖人他力本願念仏宗を興行す」とある。
 - ・「専修念仏」は、阿弥陀仏の本願によって選択された仏の名号を称する念仏を唯一の行とする教えであり、「一向専修（念仏）」という表現が、法然が独立させた浄土宗の旗印とみなされていた。
 - ・「専修念仏のともがら」と呼びかけるのは「自力聖道門」に立つ当時の仏教界との区別され、法然聖人の流れを汲む人々をあらわしている。
 - ・「専修念仏」については、明恵上人高弁が法然聖人の滅後、『選択本願念仏集』を批判する書を発表するが、その具名は『於一向専修宗選択集中摧邪輪』である。
- ちにみに明恵上人には、「われは、師をばうもうけたし。弟子はほしからず」、「たとえ百歳なりとも、法を知らずんば、十歳の比丘にしたがいて法を聞け」という言葉が伝えられている。明恵上人の修道の真面目さを伝えるとともに、『歎異抄』の「親鸞は弟子一人ももたず」というおおせとの異なりも感じる。
- ・親鸞は、法然聖人に与えられた「専修」という思想的課題をどのように確かめていった

のであろうか。

・「専修念仏」の根本関心——「夫れ速やかに生死を離れんと欲わば」（『選択本願念仏集』三選總結の文）

又云わく（選択集）、「夫れ速やかに生死を離れんと欲わば、二種の勝法の中に、且く聖道門を開きて、選びて浄土門に入れ。浄土門に入らんと欲わば、正・雑二行の中に、且く諸の雑行を抛ちて、選びて正行に帰すべし。正行を修せんと欲わば、正・助二業の中に、猶、助業を傍らにして、選びて正定を専らすべし。正定の業とは即ち是れ仏の名を称するなり。称名は必ず生を得。仏の本願に依るが故に」と。{已上}

（『教行信証』「行巻」、『聖典』（第2版）209－210頁）

勝法└聖道門

└┐浄土門└雑行

└┐正行└雑修

└┐専修└助業……読誦・観察・礼拝・讃嘆供養（「五専」）

└┐正定之業……称名（「唯称名号」）

・親鸞は「専修」という「言」を、単なる私たちの行業のあり方を示すものとしてだけでなく、「正定之業」もその意趣するところを重層的に捉えようとした。

「正」は五種の正行なり。「助」は名号を除きて已外の五種、是れなり。「雑行」は正・助を除きて已外を、悉く「雑行」と名づく。此れ乃ち、横出、漸教、定散・三福、三輩・九品、自力仮門なり。

（『教行信証』化身土巻、『聖典』（第2版）399頁）

亦「正・助」に就いて、専修有り、雑修有り。此の雑修に就いて、専心有り、雑心有り。

「専修」に就いて二種有り。一には唯、仏名を称す。二には五専有り。此の行業に就いて、専心有り、雑心有り。「五専」は、一には専礼、二には専読、三には専観、四には専名、五には専讃嘆なり。是れを「五の専修」と名づく。「専修」、其の言、一にして、其の意、惟れ異なり。即ち是れ定専修なり、復た散専修なり。「専心」は、五正行を専らして二心無きが故に「専心」と曰う。即ち是れ定専心なり、復た是れ散専心なり。

（『教行信証』化身土巻、『聖典』（第2版）401頁）

・「専修念仏」という用語そのものは親鸞の著述の中に多くは出ない。用語としては「一向専修」という表現が多い。たとえば「(12) 五濁の時機いたりては 道俗ともにあらそいて 念仏信ずるひとをみて 疑謗破滅さかりなり (13) 菩提をうまじきひとはみな 専修念

仏にあたをなす 頓教毀滅のしるしには 生死の大海きわもなし」（『正像末和讃』（『聖典』（第2版）610－611頁））がある。

「為善導之再誕 勸称名之一行」というのは、〔法然〕聖人は善導和尚の御身として称名の一行をすすめたまうなりとするべしとなり。「専修専念之行 自此漸弘 無間無余之勤」というのは、一向専修ともうすことは、これよりひろまるとするべしとなり。

（『尊号真像銘文』、『聖典』（第2版）648頁）

「教念弥陀専復専」というのは、「教」は、おしうという、のりという。釈尊の教勅なり。「念」は、心におもいさだめて、ともかくもはたらかぬころなり。すなわち選択本願の名号を一向専修なれと、おしえたまう御ことなり。「専復専」というのは、はじめの「専」は、一行を修すべしとなり。「復」は、またという、かさぬという。しかれば、また「専」というのは、一心なれとなり。一行一心をもつばらなれとなり。「専」は、一ということばなり。もつばらというは、ふたごころなかれとなり。ともかくもうつつころなきを「専」というなり。この一行一心なるひとを摂取してすてたまわざれば、阿弥陀となづけたてまつると、光明寺の和尚（善導）はのたまえり。

（『唯信鈔文意』、『聖典』（第2版）680－681頁）

わが弟子ひとの弟子といふ相論のさふらうらんこと、もてのほかの子細なり。

〔こにひとは〕自分の弟子だ、〔あのひとは〕他人の弟子だとたがいに論じあることができるようでございますことは、とんでもない事態である。

・法然聖人による専修念仏の特徴は「平等の慈悲」という精神に象徴される。その意味で、「専修念仏の人々には「弟子」というべきものが本来あるべきはずがない」（藤秀翠『歎異抄講讃』）のであろう。それに対して金子大榮は専修念仏にこそ相論が起こる理由があるという興味深い問題提起をしている。

われに來たれ、われは汝を導いてやるといふ〔…中略…〕道徳的な訓練である聖道門の立場からいへば、さう深刻なわが弟子ひとの弟子といふ争ひは出てこないではなからうかと思ふのであります。〔…中略…〕／ところが専修念仏の法といふものは、わが法に來たれといふかたちになり易い。〔…中略…〕つまり、わが法に來たれといふかたちは、法の名のおとに我慢を立てようといふのでありまして、これは反省の機会といふものがない。いつでも法といふものを振りかざしては、この法がわからないか、かの法がわからないのはけしからんといふふうなかたちになる。そしていつのまにか、わが法の主となつてゆくところの傾向が、専修念仏の中にこそ却つてあるのではないであらうか。……さうするとそこに縄張りといふものができてきて、一つの集団ができてきて、遂にわが弟子ひとの弟子といふふうなことが生じ易い。

- ・「わが弟子ひとの弟子といふ相論」

「わが」「ひとの」というところに弟子を私有化する意識があらわれている。

- ・「弟子」とは「師（匠）」(『歎異抄』第十八章) に対する概念である。

「先師」(前序)、「師匠」(第十八章)と「有縁の知識に依らずば」「善知識」「よきひと」などとの関係。

「真仏弟子」釈において、親鸞は、弟子であることの真のあり方を次のようにおさえている。

「又、深信する者、仰ぎ願わくは一切行者等、一心に唯、仏語を信じて身命を顧みず、決定して行に依りて、仏の捨てしめたまうをば即ち捨て、仏の行ぜしめたまうをば即ち行ず。仏の去てしめたまう処をば即ち去つ。是れを「仏教に随順し、仏意に随順す」と名づく。是れを「仏願に随順す」と名づく。是れを「真の仏弟子」と名づく。」

(善導『観無量寿経疏』、信巻引用、『聖典』(第2版) 242－243 頁)

「真仏弟子」と言うは、「真」の言は、偽に対し、仮に対するなり。「弟子」は、釈迦・諸仏の弟子なり、金剛心の行人なり。斯の信行に由りて必ず大涅槃を超証すべきが故に、「真仏弟子」と曰う。」

(信巻、『聖典』(第2版) 278 頁)

・「相論（そうろん）」と「諍論（じょうろん）」について。『歎異抄』には二つとも出ている。「諍論」とは異なり「相論」という概念そのものは否定されていないように思う。

親鸞ハ弟子一人モモタズサフラウ。

〔私・〕親鸞は、弟子をひとりも所有しておりません。

・「親鸞は」という名のりは、第五章と第六章に出る。第五章でも述べたように、この親鸞の利他についての言明が、一般的なあり方とは異なっているということのみならず、求道のなかで獲得されたものであることを強調しているのであろう。(ちなみに第二章では「親鸞におきては」「親鸞が」とあり、第九章には「親鸞も」とある。)

第五章の言明が獲得された歩みについては、たとえば、『恵信尼消息』は、親鸞は、四十二歳のとき「身ずから信じ、人をおしえて信ぜしむる事、まことの仏恩に報いたてまつるものと信じながら、名号の外には、何事の不即にて、必ず経を読まんとするやと思いかえして、読まざりし」という体験をしながら、五十九歳のとき風邪に臥した中で「人の執心、自力の心は、よくよく思慮あるべし」、「今はさてあらん」と領いて、あらためてよきひと法然の教えのもとに立ち返ることができたことを記している(『恵信尼消息』(『聖典』(第2版) 757－

758 頁)。このように親鸞は、一生、名利に人師を好んでしまうわが身との深い戦いの痛みを
味わいつづけた。そのことが晩年の次の和讃によくあらわされている。

よしあしの文字をもしらぬひとはみな まことのこころなりけるを
善惡の字しりがおは おおそらごとのかたちなり
是非しらず邪正もわかぬ このみなり
小慈小悲もなけれども 名利に人師をこのむなり
{已上}

(『正像末和讃』(文明本)、『聖典』(第2版) 626 頁)

・では親鸞の「弟子一人ももたずそうろう」という仰せが意味するのはどのようなことなの
だろうか。 親鸞は弟子というあり方を否定しているのか、それとも弟子を所有す
ることを否定しているのか。

・「一人ももたず」の「もたず」は「もつ」+「ず」である。中世におけ「もつ」は、辞
書によれば、「【持ち】《対象の本質や姿・形などをそのまま変えずに生かして、自分の手の
中にあらせる意。転じて、手から離さない意。》①手にしたままである。所持する。②(そ
のまま自分のものとして) ずっと所有している。」(『岩波古語辞典』抜粋)とあり、或る人
や事物を、この場合は弟子を、わが物として所有するという意味である。

・「もつ」と「ある」の異なりについて。

ちなみに、E・フロムは『生きるということ(原題は“To Have or To Be”)」において、人
間関係に「持つ様式」と「在る様式」の区別を立てている。

(ア) 弟子一人ももたず 「もつ」……所有・解釈 「持つ様式」

(イ) 弟子一人もあらず 「ある」……関係・事実 「在る様式」

・関係のモノ化

「いわんや人倫をもって、もし世財に類する所存ありて相論せしむるか」(『改邪鈔』『聖
典』(第2版) 831 頁)

しかしこのような理解によって、この言葉のもつインパクトを弱めてしまうかもしれないと
も危惧する。次回、もう少し考えてみたい。